

# 美瑛富士避難小屋へのトイレ設置をめざして

愛甲哲也（山のトイレを考える会・北海道大学）

## 1. はじめに

美瑛富士避難小屋は、十勝連峰の縦走路上にあり、大雪山国立公園の公園計画でも定められた避難小屋であり、野営指定地にも名を連ねているがトイレがない。避難小屋の周囲には、シーズン中は尿尿や紙が散乱し、登山者からはトイレの設置を求める声が寄せられている。当会では、2004年度に清掃登山を行うなど、トイレの設置に向けた活動を続けている。

## 2. 現状

大雪山国立公園は、標高 2,000m 級の山々が連なり、6月中旬から9月下旬の夏山シーズンには多くの登山者が訪れる。その利用は、主に黒岳、旭岳を中心とした表大雪と呼ばれる地域に集中するが、アクセスの整備などにより中央部のトムラウシ山周辺でも増加しつつある。

山中には、避難小屋が9つあり、その内7つにトイレがある。避難小屋に併設されているトイレは、黒岳のバイオトイレのほかは、浸透または汲み取り式である。管理人が利用シーズン中に常駐するのは黒岳と白雲岳のみであり、管理の行き届いていないところも多く存在する。

野営地は、12箇所が野営指定地に指定されており、その内トイレがあるのは避難小屋に隣接する黒岳、白雲岳、忠別岳、ヒサゴ沼、カミホロカメットクの5箇所である。携帯ト

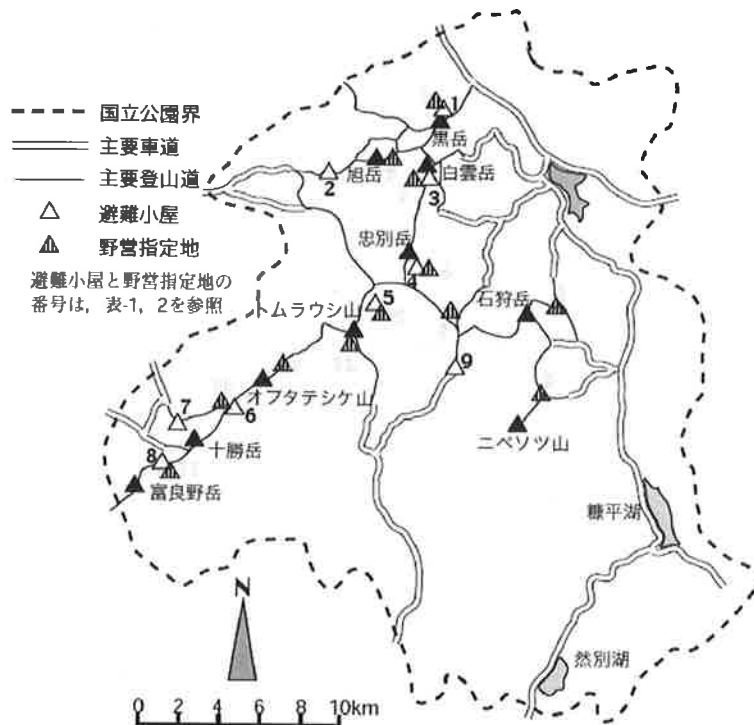


図-1 大雪山国立公園内の避難小屋と野営指定地の位置

表-1 避難小屋とトイレの状況

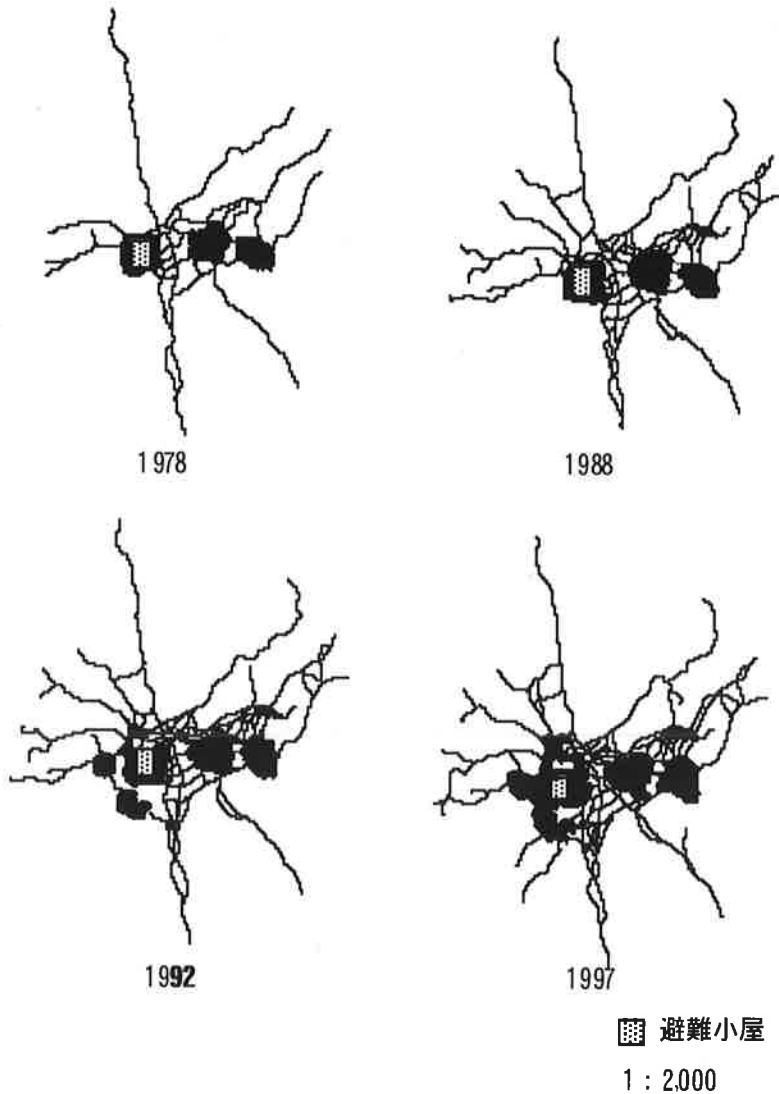
避難小屋	収容人員	トイレ	管理人
1 黒岳石室	150	バイオ	6～9月
2 旭岳石室	20	携帯ブース	無人
3 白雲岳避難小屋	60	汲取	6～9月
4 忠別岳避難小屋	40	汲取	無人
5 ヒサゴ沼避難小屋	30	汲取	無人
6 美瑛富士避難小屋	25	×	無人
7 十勝岳避難小屋	30	×	無人
8 カミカメツク山避難小屋	30	汲取	無人
9 アポイントラウシ避難小屋	30	汲取	無人

表-2 野営指定地とトイレの状況

野営指定地	トイレ	管理人
1 黒岳	バイオ	6～9月
2 白雲岳	汲取	6～9月
3 裏旭	(ブース)	無人
4 忠別岳	汲取	無人
5 ヒサゴ沼	汲取	無人
6 沼ノ原大沼	×	無人
7 ブヨ沼	×	無人
8 小天狗の科尔	(ブース)	無人
9 双子沼	×	無人
10 美瑛富士	×	無人
11 カミカメツク	汲取	無人
12 トムラウシ南沼	ブース	無人

イレ用のブースが設置された場所もある。野営指定地以外で野営が行われている場所も含めて、トイレの無い野営地の周辺では、排泄物と紙の散乱が問題視されている。

1998年に避難小屋周辺の測量および空中写真による裸地の判読を行った。美瑛富士野営地は美瑛富士と石垣山の科尔から300m程北寄りの場所にあり、標高は1,630mである。野営地の避難小屋は95年9月に倒壊し、96年8月に改築された。最も近い登山口は白金温泉で、野営地まで3時間程要する。水場は夏に枯れることが多いが野営地の東側の沢が利用される。全体は北東へなだらかに傾斜しており、テントを張るサイトが4つあり、避難小屋の周囲に裸地があった。各サイト内には、植被はほとんどなかったが東側の最も大きなサイトと避難小屋の周囲の裸地には、植被が小さな島状になって残っている場所もあった。踏み分け道は、サイト同士を結んでいるものと野営地の外側に延びているものがあった。東側の踏み分け道は沢を横切り、岩場へのびていた。沢の周囲や、岩場



美瑛富士野営地の変遷

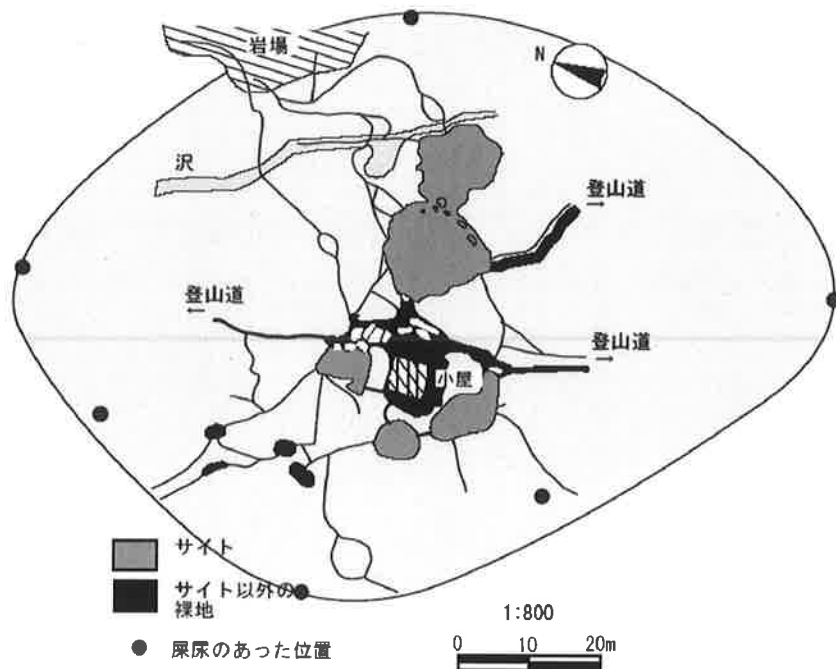
の岩の間には、紙や大便が放置されていた。この沢は、シーズンはじめには水場として利用されているが、調査時には水がほとんど流れておらず、用を足す人がいた。それ以外の外に延びる踏み分け道の途中と末端もトイレ場となっており、直径約 2.0m 程度の裸地が生じている場所もあった。

美瑛富士野営地の空中写真からは、サイトが雪で覆われていた 1982 年を除き、サイト、踏み分け道、登山道を判読することができた。裸地が年々拡大し、88 年以降に裸地の拡大が多くなった。中央部の 2 つのサイトと避難小屋の周囲の裸地が年々拡大し、周囲に生じた小さな裸地と結合し現在のような状態になったことが分かった。踏み分け道の長さとも本数も、年々増加した。野営地の中央部に分布する踏み分け道は、既存の踏み分け道同士、サイトの間、サイトと沢を結び、年々複雑化していた。野営地の外に延びる踏み分け道は、それぞれ分岐、延長を繰り返し、範囲を拡大していた。

### 3. 清掃登山について

地域の関係者の聞き取り調査等に加えて、避難小屋利用者からの意見の収集、および周辺のし尿の状況に関する資料の収集等を行い、その一環として美瑛山岳会のご協力および美瑛町のご理解をいただき、夏山シーズン終了後の 2004 年 9 月 5 日に清掃登山を行った。ゴミや使用済みの紙を回収するだけでなく、し尿散乱の状況を把握する意味も込めて放置された大便の回収も行うこととした。

当日は当会の横須賀代表はじめ、山のトイレを考える会会員、北海道の山メーリングリスト会員などの他、美瑛山岳会の内藤事務局長を含め 17 名が参加した。白金温泉の野営地には前日から先発隊が宿泊し、当日朝 7 時に全員が登山口に集合した。簡単な自己紹介と



サイトの測量は愛甲・留目(1999)より

図：美瑛富士野営地の現況

代表の挨拶のあと、ビニール袋、火ばさみ、バケツといった清掃用具を担いで登山を開始し、数回の休憩をとりながら、約3時間半で美瑛富士避難小屋に到着した。

現場では、周辺を4つの範囲に分け、一班が一つの範囲を担当することとしてそれぞれが大便および使用済みティッシュの回収をはじめた。小屋のすぐ間近なところから、登山道沿い、低木の茂みのかげなど、至る所に紙が散乱し、大便も少なくなかった。1時間ほどで清掃は終了し、51の大便、142の使用済みの紙、その他ゴミを回収した。GPS およびレーザー測距計で簡単な測量も行ったところ、大便、ティッシュなどのトイレ痕は、図に示したように、およそ小屋から半径50メートルの範囲内に分布していた。

2005年のトイレデーでも再び現地を訪れた。尿尿の数は20箇所程度と少なかったものの、その分布範囲はほぼ同じであった。

2004年の清掃登山に参加した会員等からは、以下のような感想が寄せられた。

「小屋の裏からハイマツ帯の陰まで、身を隠せるあらゆるところに広がっていて、かなり汚いなーって感じがします。」

「想像していたよりも範囲が広くて驚きました。」

「まさかとは思ったが、自分も最初の一つを拾うときにはグッ！と来た。」

「登山者が後ろめたさを感じながらやっている、ということを感じた。したくはないけど、仕方なくというような。やりたくてやっているわけではないような感じがした。」

「じっくり探すとまだ相当の大便があったのではなかろうか。野営地の下の沢では水を汲む気がしない。とりあえずトイレが出来るまでは携帯トイレの必要性を痛感した。」

今回の清掃登山を通して、あらためてトイレの無い宿泊施設の不便さ、不自然さを実感するとともに、トイレの必要性を会員が再認識する機会となった。

清掃登山の報告書は、関係機関等に送付した。小屋に設置した名簿については現在集計中である。

#### 4. 最後に

美瑛富士避難小屋の周辺には尿尿と紙が散乱していた。トイレの設置を求める登山者の声も少なくない。これ以上の問題の放置は、本道を代表する山岳地の山中の宿泊地としては適切ではないと考える。署名には北海道内だけではなく全国から2万人を超える署名が集まっている。関係団体とも協議の上で、関係機関にはトイレ設置をはじめ、総合的な対策の検討を要請する予定である。今後とも、みなさまの協力をお願いしたい。

(2004年フォーラム掲載資料に加筆)